

人間であることの野性に向けて —内なるカマラを思い、カマラを生きる—

鷲野克己

1. 「人間として」ということ

私は、人間として生きている。私がこのように言うとき、そこには、この私が生きているということが、イヌやネコが生きているのとは違う、ましてや木や草花が生きているのとも違う、総じて人間以外の他の生き物が生きているのとは異なるような生きる私の在り方が含意されている。すなわち、私が生きているということにおける、私が人間であることに固有な位相の存在が思い描かれているのである。

もちろん、生きることを生物学的な生命活動という視点から見れば、人間である私が生きていることには、イヌやネコが生きていることと共通して語りうる次元があることは明らかである。私は、呼吸し、摂食し、消化し、排泄し、眠る。群れ、交わり、産み、育てる。生まれ、長じ、病み、老い、衰え、やがて逝く。生物学的な生命活動としてのこうした私の生きる営みは、それ自体としては他の生き物における同様の活動と共通した役割と機能を担っている。

他の生き物の生命機構や活動は、人間から見てそれぞれがいかに複雑精緻に構成され、巧妙華麗に遂行されていようとも、総じて機能的な自然過程であり、当該の生き物たちにとって、自身の生命活動に関して、その機能的次元を超えて対象化することは不可能である。呼吸し、摂食し、消化し、排泄し、眠る飼い犬も、生まれ、育ち、交尾し、老い、衰え、朽ちる野良猫も、

自らの生まれてきたこと、生きていくこと、死んでいくことの何たるかを思い煩い、その意味を問うことはない。彼らはそんな「厄介」な問いとは一切かわらないまま、生ききり、死にきることができる。自然は、彼らにそのような自然過程としての生死のあり方を恵んだのだとも言えよう。しかしながら、人間である私は、自身の生物学的な生命活動の機能的次元に留まったままでは生きていくことができない。こうした生命活動を生きつつ、そのように生きている私の在り方の意味を問い、理解しようとせずにはいない。すなわち、「人間として」というのは、人間である私が生きることにおける拍動する心臓の一打ち一打ち、呼吸する肺の一息一息が、機能的な自然過程であることを超えて、いったい何であるのかについての関心を私が抱え込んでいることの表明なのである。

自分自身の生を意味づけ、理解しようとする事へのこうした関心は、私たちが生きていることにおける付随的、付加的な事柄ではなく、私たちの生の在り方を他の生き物のそれから本質的に際立たせる特質である。このことに関して、宗教哲学者上田閑照は、霊長類研究のめざましい進展にともない、ヒトとゴリラやチンパンジーとを、学問的定義づけという点で区別することが容易ではなくなってきた事態を承けて開かれた「人間概念の自然・人文科学による再検討」をテーマとしたシンポジウム¹⁾で次のように述べている。

「(人間が) どのように定義されるにせよ、まず最初にはっきりと言えることは、人間存在を定義しようとする試み自体に、既に最も基本的な定義が出ているということ、そしてそこにこそ人間存在の比類のない特質があらわれているということです。即ち人間というのは自分自身を定義しようとする存在であるという定義です。それは即ち、人間存在が「自己理解」的存在であるということです」(括弧は引用者 上田 1991: 104)。

人間とは何かという問いへと向かう霊長類研究の基本的出発点は、生物と

しての人間とゴリラやチンパンジーとの連続性や非連続性に関する関心である。そして、個体識別の下での詳細で綿密な長期にわたる生態観察や調査、ヒトとチンパンジーとにおける DNA 配列の精密な比較研究などの成果によって、その連続性を強調する視点は近年いよいよ強固なものになりつつある。しかし、そのように、ヒトとチンパンジーとの類縁関係、生物としてのヒトとチンパンジーとの連続性や非連続性に関心をもち、それを確かめようとしているのは、どこまでも人間のほうである。どうやら、チンパンジーは、自分たちと人間とのかかわりについて、少なくともそれを主題として話し合うために寄り集まりはしない。上田にしたがえば、「チンパンジーはどこまで人間か」²⁾ というようなことをテーマにしてシンポジウムをしているのは、チンパンジーではなく私たち人間であるということ、そこに、「質的な飛躍を伴った人間存在の特質がある」(上田 1991: 106) ののである。

「チンパンジーはどこまで人間か」という問いへの解答は、霊長類研究の進展に応じて常に暫定的なものであるほかはないとはいえ、その「どこまで」という「チンパンジーと人間との境界」は、丁寧な学問的議論を通じて、不断により厳密で明解なものになっていくことだろう。だがそうした議論によって、チンパンジーとの境界がいかに厳密で明解なものになっていこうとも、この学問的成果はそのままでは、「チンパンジーはどこまで人間か」と問う私たちの関心を満足させはしないだろう。それというのも、「チンパンジーはどこまで人間か」という私たちの問いの根底には、チンパンジーの生理や行動や生態それ自体への関心を超えて、そのようにチンパンジーと自分たちとの距離を問題にするということを含めて、私たちが人間として生きていることの何たるかへの関心が横たわっているからである。

人間としての私たちが発するチンパンジーへの問いにおいて重要なことは、私たちが、生物として私たちと近縁であろうと感得するチンパンジーという存在に出会うとき、「チンパンジーはどこまで人間か」という問いの形で、自己自身を省みることができる、あるいは省みざるを得ない生き方をしてい

るということである。すなわち、私たちは、「チンパンジーはどこまで人間か」という問いを通して、そのようにチンパンジーを問うという在り方を生きる人間としての私たち自身を問うているのである。こうした自身における「人間であること」への問いの大切さについて、上田は後の作品でまたこうも述べる。

「人間にとって大切なこととは、単に必要なこと、重要なこととは違って、何かもっと本質的な次元のこと、それが無ければ人間が人間でなくなるような、そのようなものです。何が人間にとって大切か。ぎりぎりのところを単純に出しますと、それは、まさに、「人間であること」、「人間として生きること」にはかならないと言いたいと思います。人間が人間であることは自明なことではないからです」(上田 1998: 46-47)。

上田によれば、私たちは生物の種としてはヒトに違いないが、「人間が人間であることは自明なことではない」がゆえに、「ほんとうに人間として生きているか」という問いに面して、反省せざるを得ないのである。このように見てくると、人間として生きる私たちが、自己自身を定義づけようとする存在として「自己理解」的存在であるとされるとき、その自己理解性とは、人間である自己自身の生を、「人間として」という鏡に照らして、絶えず問い続けることの謂いにかならないと言えよう。

「生きているか」と問われれば、私が呼吸し、摂食し、消化し、排泄する限り、また、私が目覚め、活動し、休息し、眠り、再び目覚める限り、私は生きていないわけではない。繰り返せばしかし、私は、そうした生物学的に説明される生命活動の次元で生きていることにおいて、自分が人間であることを収めることができないのである。生きている人間である私にとって、同じもので空腹を満たしても、誰と一緒に食べるかでその意味は大きく変わる。同じ時間睡眠をとっても、何処で眠るかでその意味ははなはだ異なる。人間

の営みとしての食事や眠りを語る時、私はそこで栄養やカロリーの必要量や望ましい睡眠時間だけを問題にするのではない。摂食や睡眠といった基本的な生きる営みが生理的な欲求充足や快を超えて意味づけられる世界へと、私は自らの生についての問いを不断に投げ入れていくのである。とはいえ、その「人間として」ということを、私が生きていることへの問いにおける鏡であるとするのは、そこに、私が生きているということについての曇りのない手本や範型が明確に映し出されることを示しているのではない。むしろ、「人間として」という鏡にあっては、私が「人間であること」が、イヌが「イヌであること」においてその生きていることの即自性に安んじて自足しうるのとは異なり、生物学的な自明性や安定性の次元とは無縁な謎と混沌であることが、問うたびごとにその都度露わになっていくのである³⁾。

私は人間でありながら、その「人間であること」は自明ではなく、安定してもいない。「イヌがイヌでないこととは無縁な形でイヌである」ようには、「人間は人間ではないこととは無縁な形で人間である」とは言えない。たとえば、「こんなことを為した私はもはや人間ではない」という悔悟は、一方で自身が「人間であること」を前提としている。つまりこれは、「もはや人間ではないような在り方でもなお人間であるほかはないこと」への如何ともし難い自責である。「人間として」という鏡に、「人間であること」が照らし出されるとき、そこには「人間ではなくなること」の深淵が否応なく開かれている。すなわち、自身が今ここにこうして生きていることにかかわって、人間である私が、「人間として」という形で自己の生の意味をいくら問い詰めても、その意味の「底は抜けている」と言わねばならない。「私は人間として生きている」と語ることは、私が生きていることにおいて私が「人間であること」が、どこまでも謎と混沌であることを痛感することなのである。しかし同時に、「人間であること」の意味の底が抜け、「人間ではなくなること」に触れているがゆえにこそ、禍々しくも魅力的な今ひとつの「人間であること」の異様な相貌が、私が生きていく中で思いがけず眼前に立ち現れて

くることがある。そして、そうした相貌に面して、私は、「人間ではなくなる事」の深淵が顔を覗かせる地点から、「私が人間として生きている事」を改めて反省し出すのである。それゆえ、「私は人間として生きている」と語ることは、私とその謎と混沌の直中であって、「人間ではなくなる事」への恐れと戦きあるいは歓喜と陶醉をも感得しつつ、「人間である事」の意味を絶えず新たに紡ぎ出していくことでもあるだろう。

2. 「狼に育てられた子カマラ」への関心

「私は人間として生きている」と言うときの、「人間である事」の意味の底抜けに関する上述してきたような捉え方のもとに、以下、いわゆる「狼に育てられた子」として語り継がれてきた或る少女の生に考察の眼を向けたいと思う。彼女は、1920年10月にインド北東部のジャングルにあった大きな白アリ塚で「発見」、「救出」され、程なくカマラと名付けられる。そして、その後の生活と行動を生涯にわたって克明に記録されることになるのである。

幼児期に、遺棄や迷子など何らかの理由で人間社会から比較的長期にわたり隔絶された環境のもとで成長したとされる子どもは、しばしば「野生児」⁴⁾と呼ばれる。「狼に育てられた子」は、こうした「野生児」の一樣態として、人間の教育や発達や社会化を扱う研究領域では、人間性の発現に対する環境と素質の影響を説明するのに、人々の耳目を惹きやすい好個の事例として、繰り返し取り挙げられてきた。カマラという少女の名は、同じ場所で同時に「救出」され、後にアマラと呼ばれたさらに年少の女兒の名⁵⁾とともに、そうした「狼に育てられた子」の中で、最も「著名」なものとして知られている。年少のアマラのほうは、「救出」後、一年もたたない1921年9月、腎臓病で亡くなってしまいが、カマラは1929年9月にやはり泌尿器の疾患がもとで世を去るまでの九年間、人道的な「救出」者にして献身的な「養育」者であったシング牧師夫妻の運営する孤児のための施設で過ごしたのである。

当時推定年齢が八歳ほどとされたカマラが、同じく二歳ほどとされたアマラとともに「発見」され、「救出」された時、彼女たちは、人間ではない「化け物」とみなされた。「発見」され、「救出」され、「保護」され、「養育」されたカマラの生について書き残された記録を繙くとき、そこに記されたカマラの一連の際だった行動は、私たちに鮮烈な印象を植え付ける。それらの行動は、通常思い定められる「人間らしさ」の諸徴表からは甚だしく乖離したものである。その行動の異様さに、私たちは大きく目を瞪る。「化け物」と決めつけられたカマラを前にして、私たちは、心身の奥底から激しく深く揺さぶられる。そして、彼女を忌避するのではなく、彼女にどうしようもなく惹きつけられるのを感じる。それはカマラへの単なる憐憫や好奇の現れというものではないだろう。彼女に対する私たちのこうした抑えがたい感応と関心の意味するところを、その根源へと遡りつつ明らかにすることを試みたい⁶⁾。それは、カマラという少女が、「人間であること」の安定した意味の底が抜けて、「人間ではなくなること」へと開き晒されている「人間として」の私たちの生の在り方をめぐる大切な問題を、「善意の名の下に翻弄された」というほかはないその生涯を通じて、私たちに身をもって指し示していると考えられるからである。

考察の手順として、まずここでは、人間の教育や発達や社会化を扱う研究領域における、カマラへ向けられてきたこれまでの関心のあり方を、教育人間学者西平直による研究に依拠しながら、少し整理しておくことにしよう。そして次章では、整理されたそうした関心のあり方に対する西平の批判的視点に基づいて、カマラが「救出」、「保護」された出来事のいきさつを辿り直し、これまでの関心のあり方を超えてカマラという存在と改めて出会いうる次元を論じる。しかしこの作業を経て、カマラとの改めての出会いが意味するものを捉える西平の視点に、私はあるもどかしさを感じることになるだろう。そこで、章を改めて、このもどかしさの感覚を明らかにすることを通して、西平がその柔軟かつ鋭利な批判性のもとに開示したカマラ像を継承しな

がらも、そこから分岐していくもう一つのカマラ問題にアプローチしたい。それは「カマラとは誰のことか」という問いを携えて、私たちの「内なるカマラ」へと迫っていくことになるだろう。

西平は、「教育はカマラを幸せにしたか — 『狼に育てられた子ども』再考一」と題した論考(西平 2005)において⁷⁾、狼に育てられた子の話が、私たちにとってこれまでどのような場で、いかなる文脈で目にされ、耳にされてきたものであったかを丹念に振り返っている。西平は、まず彼自身の授業でのカマラをめぐる問いかけに応じた受講学生たちの報告を援用しながら、この話が、教育学はもとより、心理学や社会学の概論書や入門書の類でかなりしばしば取り挙げられてきたことを明らかにする。そして、それらの書物におけるカマラに関する具体的な記述を改めて辿りながら、その記述の背後に潜むカマラへの眼差しの内実を批判的に特徴づけていくのである。

西平によれば、カマラの話は、成長における「遺伝と環境」をめぐる議論の導入に使われ、遺伝的にはヒトとして生まれても、環境が不適切であれば人間へと育っていかないといった論調でしばしばホスピタリズムの話へとつながられていく。また一方で、非人間的環境への驚くべき順応性という切り口で、「人間の適応能力の可能性」という文脈に組み入れられることもある。そして、「教育の必要不可欠性」を実証する事例として、さらには人格や情操や言語にかかわる人間としての発達や学習に「臨界期」が存在することの恰好の例証として、教育的働きかけの適時性の問題を説くのに都合よく使われてきたのである(西平 2005: 2-4)。こうした一連の記述を貫くカマラへの眼差しにおいては、カマラはまさしく教育の失敗例であり、「[人間としての充実な発達を] 遂げ得なかった最たるもの」(西平 2005: 4)という位置に収められていくのである。

カマラへのこのような眼差しのあり方に対して、西平は「カマラは、人間になりたかったのか」、「一体、カマラは何を望んでいたのか」、「何がカマラにとって、最も辛いことだったのか」と対抗的に問いを投げかけていく。そ

して、こうした問いを取って、「ひねくれた問い」とも称した上で、上に見たようなカマラの話の使われ方には、この「ひねくれた問い」は問わないで進められるという前提があることを、私たちは知っておくべきではないかと提言する。そうしないと、「彼女に対して失礼ではないか」（西平 2005: 4）というのである。西平は、このように論脈を切り開きながら、救出という名の下に、シング牧師たちがカマラに対してなした行為を、あとう限りカマラの視点に立って語り直していこうとする。

次章では、カマラに向けられた西平の眼差しとその眼差しに応じて浮かび上がってきた彼女の形姿を詳しく辿っていく。西平に伴われて私たちは、「人間になりきれなかった失敗例としてのカマラ」とは異なるカマラと出会うことになる。

3. 「カマラ」への眼差しを注ぎ直す

シング牧師の書き残した記録によると、カマラが「救出」されたときの様子は、おおむね次のようであった（シング 1977: 35-37）。

土地の村人たちから得体のしれない「化け物」と恐れられる異様な生き物を追い払ってほしいとの懇願を受けたシング牧師は、事情を知らせずに雇い入れた別の村の男たちを伴い、1920年10月17日午前、その「化け物」が住んでいるらしい高さ3mを超す神殿の如き巨大な白アリ塚⁸⁾に到着した。そして、彼は男たちに指示し、塚を掘り返し、搜索を開始したのである。シャベルと鋤で2、3回掘ると、まず一匹の狼が穴から出てきてジャングルの中へと逃げ去る。すぐに二番目の狼が驚きと必死の様子で現れ、はじめの狼の後ろを追った。その後、母親とおぼしき一匹の牝狼が現れ、「地面の上を稲妻のように突進し、掘っている男たちを襲った」後、再び穴に飛び戻ったが直ぐに出てきて、「吠えたて、絶えず走り回り、怒り狂って地面をひっかき、歯ぎしりしながら」男たちを威嚇し続け、そこを立ち去ろうとしなかった（シ

ング 1977: 36)。そして、シング牧師が、事態の全容を的確に判断しきれず、雇い入れた男たちを統括することもできず「棒立ち」しているうちに、母親狼は、男たちによって矢で射抜かれ絶命するのである。

母親狼を射抜いた後、シング牧師たちは、アリ塚の中央の洞穴の底に絡まりあっていた二匹の子ども狼ともう二匹の恐ろしい「化け物」のような生き物（カマラとアマラ）とを、一匹ずつ引き離そうとする。しかしながら、この化け物のほうが子ども狼よりも凶暴で、恐ろしい形相をしたり、歯をむき出したり、襲いかかってきたり、再びかたまりあおうと走り戻ってきたりして、手に負えない状況だった。そこで、シング牧師たちは、用意した大きな布を生き物たちのかたまりの上に覆いかぶせ、一匹ずつ引き離した後、それぞれを「頭だけを自由に動けるようにしておいて、布で縛り上げた」（シング 1977: 37）のである。

西平は、「救出」と称されるこうした出来事を、カマラ自身はどのように受け止めたかに思いを向ける。カマラが、シング牧師たちのことを「助けにきた」と感じたとは考えにくい。住処は襲撃、破壊され、仲間たちは捕獲され、母親は射殺された。そして全てを奪われ、捕虜にされたのである。「救出」なのではなく、むしろそれは「侵略」である（西平 2005: 12）。カマラは幼い頃、迷子になったのか、親に捨てられたのか、狼にさらわれたのか。もちろん、確かなことはわからないとしつつ、西平はいう。

「いずれにせよ、カマラは、まず人間の親から「引き離され」、その何年かの後、今度は、狼たちから「引き離される」。この二度にわたる強制的な「分離・別離・喪失」が、彼女の心理的な基盤になっていたことは間違いない。そこで体験された不安、恐怖、不信。実はそれこそが、カマラを理解する際に、もっとも重要な点なのではないか」（西平 2005: 8）。

さらに、「救出」されてからの1週間、カマラたちは、「虐待」ともいうべ

き、甚だしく過酷な扱いをうける。「救出」後、シング牧師は、滞在先の村人の家の中庭に、飯と水を入れる土つぼの設置された縦横約2.4mの柵を作り、そこにカマラたちを閉じこめ、翌日には、伝道旅行に出かけてしまう。シング牧師は留守中のカマラたちの世話をその村人に依頼し、承諾させたのだが、彼とその家族は、自分の家の中庭に「化け物」がいることでパニックになり、カマラたちに食べ物も水も一切与えることなく、シング牧師が旅立った直後に逃げ出したのであった。シング牧師が戻ってきたとき、カマラたちは、始末におえないほどの衰れな状態で横たわり、飢えと渇きと恐怖のためにあえいでいた。そのあまりに痛ましい様子を目の当たりにし、シング牧師は自らの怠慢に泣けてしまったと記している（シング 1974: 36-38）。そして、苦心してなんとかカマラたちに水分を摂らせ、介抱し始めるのである。

西平の言を借りれば、「八歳前後の女の子が、ある日突然、「異人」の襲撃を受け、親を殺され、囚えられたまま六日間、水も与えられずに閉じ込められる体験。それが「救出」として語られてきた出来事」（西平 2005: 12-13）だったのである。西平は、このときカマラに生じたであろう「恐怖感、不信任感、心の奥の深い傷」に対して、私たちはもう少し丁寧に目を向けてはどうかと問いかけるのである。

もちろん西平は、カマラを「救出」し、「保護」しようとしたことは「文明」の側に身を置く人間の身勝手な傲慢である、などと極端な自然回帰を謳う単純な「野生児」礼賛に与するわけではない。施設で文字通り献身的に養育したシング牧師夫妻のカマラへのかかわりと働きかけの根底には、「カマラの中に人間らしさを取り戻してやりたい」という紛れもない善意があったと言わねばならない。しかし、その善意は同時に、カマラにおける「狼らしさ」に対する断固とした徹底的な否定と拒絶の意志でもあった。すなわち、シング牧師夫妻にとって、「人間らしさの回復」は、カマラが狼たちとともに生活する中で身につけた習性や生き方の全てを捨て去ることなしには実現しないものだった。要するに、シング牧師にすれば、そうした狼の属性から離れ

ることは、カマラにおける「人間らしさの回復」にとって「何ら疑われることのない無条件の前提」、「絶対の正義」だったのである。であればこそ、「狼の属性を奪われてゆくカマラの不安を思いやる記述」などは、シング牧師の記録には皆無なのである（西平 2005: 15）。

西平は、カマラを人間社会に戻すことは妥当であったかという問いが決して容易には答えのない問いであるとしつつ、「人間になる訓練の過程で、狼らしさが失われてゆくことは仕方がない」（西平 2005: 29）という。しかし同時に西平は、その失われてゆく「狼らしさ」に対する頭ごなしの拒絶は、それまでのカマラの存在を全面的に否定することを意味するのであり、ここに私たちがカマラとかかわる際の工夫の余地がありはしないかと問いかけ、次のように述べる。

「つまり、失われてゆく「狼らしさ」にどれだけ思いを馳せることができるか。教育の名のもとで失われてゆくものに対して、どれだけ正当な価値を与えることができるか。ただ拒否するのではなく、むしろ「狼らしさ」を保存しつつ、「人間らしさ」と統合してゆく。そうした「バイリンガルの発想」こそが工夫の鍵であるように思われる」（西平 2005: 30）。

西平は、従来の教育学や心理学におけるカマラの話の用いられ方は、戦後ヒューマニズムの思想を基盤としていると捉え、そのヒューマニズムは、人間中心主義の一面を持つと述べる。そして彼自身は、そうしたヒューマニズムを拒否したいのではなく、むしろその価値を大切に守りたいという。と同時に、それが当然自明のように切り落としてきた裏面を、はっきり確認しておこうとするのである。

「カマラに人間性を回復させた＜教育の営み＞を大切にすると同じだけ、カマラと共に過ごした＜母親狼の営み＞を大切にしたい。少なくとも、その

痛みを覚えておきたい。あるいは、牧師夫婦の献身的な努力を存分に評価するのと同じだけ、実はその努力が、裏から見れば、カマラから何を奪うことになったのか。カマラの大切な何を決定的に傷つけたのか。その痛みを自覚しておきたいということである」(西平 2005: 34)。

こうした西平の考えは、人間の生き方を考える上で、人間中心の発想から安易に離れる試みが、私たちの日常的で安定した生活基盤から遊離し、生存の基本的安全さえ脅かす危険性を有することをしっかりと自覚している。そしてこの自覚に立った上で、にもかかわらずやはり、「人間であること」について、人間だけを中心として考えることを自明とせず、人間が生きるための犠牲となる他の生命や人間もその一部であるような自然や地球規模の視点から捉え直すことの重要性を、なんとかして説得的に語りだそうとするものである。

小論は、上来述べてきたように、私が「人間として生きている」というとき、その「人間であること」は何ら自明ではないとする立場に立つ。そして、「人間であること」の意味の底が抜けて、恐れと歓喜とを抱え込みつつ「人間ではなくなること」へと開き晒されているところに、「人間として生きていること」の課題と可能性の原点を見ようとする。この立場にとって、カマラ問題への西平の眼差しから受け取る刺激は極めて大きい。西平は、カマラ自身の側に寄り添って、深い共感と痛切な哀惜の念とともに、「狼に育てられた子」であると同時に「人間である」彼女の生涯を丹念に辿り、描き出した。私たちは西平とともに、数奇な過程を歩んだカマラのかげがえのない生涯について、「十全な人間的発達を遂げられなかった失敗例」などとして教訓的に事を取める視点を超えて、彼女は心の奥底でほんとうのところ何を思い何を感じて生きたのかという問いを携えつつ、思いを深めていくことになる。

だが同時に小論における私は、カマラに向けられるこうした西平の眼差し

に対して、微かなしかし容易には消し去りがたいもどかしさの感覚を禁じ得ない。結びへの橋渡しとなる次章では、このもどかしさを解き明かすべく、カマラの生涯へ向けられる眼差しを、「カマラとは誰のことか」という問いをめぐる考察を軸として展開させていく。それは、私たちが「人間であること」の謎と混沌の直中から、生きることにおける野性の意味を、恐れの対象としての粗野な暴力としてではなく、歓喜に溢れる瑞々しい力の迸りとして紡ぎ出すことへ向けて道標をたてる試みとなるだろう。

4. 「カマラ」とは誰のことか

西平が「狼に育てられた子」カマラにむける眼差しは、繰り返すが、この上なく暖かく柔らかく、共感と哀惜に満ちたものだ。しかも、その共感と哀惜は、前節での考察からも明らかなように、徒に過激な自然礼賛ややむを得ず失われたものへのナイーブな感傷のなせる業では決してない。西平は、カマラに「人間らしさ」を取り戻させようとするヒューマンリズムを基本的に擁護する。その上で、彼女の生がその中でおそらくはある種の安定と安心とを得ていたであろう「狼らしさ」に関して、単に拒絶し否定するのではなく、「人間らしさ」の回復に向けられるのと同じだけの配慮を施し、敬意を払うことを試みようとする。そして、こうした観点から、シング牧師夫妻の働きについて語るのと同等の重みで、カマラを育てた母親狼の痛みを語るのであれば不公平ではないかとも述べるのである（西平 2005: 34）。

私たちは、西平にしたがって、母親狼との共同生活、アマラや他の子狼とのかかわり、住処を破壊され、母親狼を殺され、無理矢理に捕獲、連行された出来事を、狼に育てられた「人間である」カマラはいったいどのように体験したのかということに、一度はしっかり思いを馳せてみる必要があるだろう。そうしない限り、私たちにとって、カマラは単に「あってはならない不幸で不運な生涯を送った子」、「私自身もそうになっていたかもしれないが、適

切な環境に育ったのでそうならなくてよかったと思う上で引き合いに出される子」で終わってしまうからだ。そしてこの場合、私たちは、僅かな憐憫と押し隠した好奇の眼差しとを投げかけつつ、カマラと永遠にこともなげにすれ違うだけなのである。

西平の主張は、カマラの生涯がこれまで、人間的発達の失敗例として、「人間らしさとは何か」への反省を徹底することなく、都合良く語り捨てられてきたことへの、静かな、しかし強烈な抗議となっている。西平は、カマラが狼と共に暮らしていた在り方、いわばカマラの「狼らしさ」の中に、人間である私たちと共有しうる心性の原理的な現れを見て取る。彼は、「狼に育てられた」カマラの中に息づいている、私たちの「人間らしさ」に親和的なものに光をあてるのである。約言すれば、カマラの中に私たちを見ようとするのである。

西平がカマラの生涯を記述する際、繰り返しそこへと立ち返るのは、一連の「救出」という名の下に行われた「侵略」と「虜囚」の体験である。そしてその体験がカマラにもたらしたものを言い表すのに用いられる言葉は、前節でも見たように、「傷」であり「痛み」であり、また「不信」であり「不安」であった。加えて、シング夫人のマッサージによって、カマラの怯えが癒され、彼女に「人間らしい愛情」が戻ってきたと記される出来事について、西平は、それは「人間らしさ」ではなく、カマラが狼と暮らしていた頃の安心感、つまり「狼らしさ」が戻ったのだとする（西平 2005: 14）。さらに、「救出」される以前の、母親狼たちの共同生活におけるカマラに関しては、狼社会での「一人前」として生活していたのではないかと述べる（西平 2005: 11）。

こうした一連の語彙や語法によって浮かびあがるカマラの形姿は、自身には微塵の咎もないにもかかわらず、再三にわたって逆境に投げ込まれ、心身の安寧と平穏を奪われ続けた生身の少女そのものである。ここには、カマラへの西平の深い共感があることは、もとより言を俟たないところだろう。し

かし、そのことと並んで、小論の問題意識からしてやはりどうしても指摘されるべきは、ここで西平がカマラの「狼らしさ」の中にその親和性を見ようとする私たちの「人間らしさ」は、「人間であること」が、恐れと歓喜を伴いつつ「人間ではなくなること」へと如何ともし難く開き晒されているという事態を、必ずしも抱え込もうとしてはいないように思われるということである。

もちろん、カマラの「狼らしさ」の中に「人間らしさ」の原理的な現れを見ようとする西平の視点は、従来の人間中心主義的なヒューマニズムを超え、今日的な地球規模の問題を見据え、人間以外の「いのちとの連帯」や人間もその一部である「自然との共生」をも展望するような視野の広がり確かに有している（西平 2005: 35）。それゆえ、ヒューマニズムを超えようという意味では、西平の視野のもとにおける「人間らしさ」は、自明で安定した「人間のためだけの人間らしさ」のイメージに既に覆している。だが同時に、ここでの「人間らしさ」は、「人間として」という自問を何処までも掘り進めるなかで、「人間であること」の、平板で偏狭ではあるが安定した意味の領野から連れ出され、「人間ではなくなること」という底抜けの淵のほとりへと導かれるような「人間らしさ」ではないように思われるのである。西平の視野のもとでは、私たちは、その淵を前にして、淵の底抜けから目を逸らさず、恐れと歓喜とに全身を貫かれつつなおも「人間であること」の動揺を生き続けるよりも、「人間らしく」あるために、敢えて、いのちや自然と「連帯」し「共生」する側に与することを選ぶことになるのではなからうか。

私は、ここで、今日の地球規模の環境問題などを議論する上で、「連帯」や「共生」という思想が有する重要性や有効性に疑義を挟もうとしているのではない。こうした「人間のためだけではない人間らしさ」を志向する思想に与するとしても、私たちが「人間であること」の意味が、この「新たな人間らしさ」に即して、明確な輪郭と揺るぎない内実を獲得し、穏やかに安定するわけではないということを描きたいのである。「連帯」や「共生」に

あっても、私たちが「人間であること」の謎と混沌が解消されるわけではない。「人間のためだけではない人間らしさ」においても、私たちは人間でありながら「人間ではなくなること」へと開き晒されている。そもそも「人間のためだけではない」という発想それ自体が、私たちが穏やかに安定した形で「人間であること」に自らを収められないことの証ではないのか。

それゆえ、カマラの体験を思うことを通して、カマラの中に私たちの「人間らしさ」の萌芽が見出され、さらにそれによって、私たちの「人間らしさ」に「人間のためだけではない」地平がもたらされるのだとしても、その地平はまた、私たちにとって紛れもなく、「人間ではなくなること」へと開き晒される地平でもあると言わねばならないだろう。カマラの「狼らしさ」の中にある「人間らしさ」が、ほかでもない私たちの「人間らしさ」の原理的な現れでもあるなら、私たちの「人間であること」は、とりもなおさずカマラの「狼らしさ」をその懐深くに抱え込んでいる。すなわち、私たちがカマラに思いを致すとき、私たちはカマラの中に私たちを見ると同時に、私たちの中にカマラを見るのである。より端的には、カマラが私たちだというだけでなく、私たちがカマラなのである。であればこそ、私たちは、カマラに対して、暢気に憐憫や好奇の眼差しを注いではいられず、ましてや自身とは無縁の異様な「化け物」として、彼女を忌避し遠ざけることなどできはしない。彼女の生の在り方に面して、心身の奥底から打ち震えるような激しい動揺を覚えずにはいない。カマラは、人間である私たちが「人間であること」を生きる中で、「人間ではなくなること」へと開き晒される地平において出会う私たち自身なのである。

こうして、私たち自身がカマラであることが明らかになった今、カマラである私たちが、「人間であること」の意味を、喜びとともに見いだす可能性を展望して、小論の結びとしたい。

5. 「カマラ」を生きる ―結びにかえて―

シング牧師の記録によれば、カマラは、収容された施設で過ごし始めた当初、地面に置かれた皿に犬のように口をつけて飲み食いするのが常であった。あらゆる着衣をいやがり、無理矢理縫いつけられた下帯もいつもほどこうとした。歩行は基本的に四つ足であった。火に脅える一方で夜の闇を全く恐れず活動し、入浴を極端に嫌い、時と場所をかまわず用便した（シング 1977: 65-76, 125-135）。目を瞞るべきカマラのこうした行動は、施設生活に慣れるにつれて、徐々に消滅するか、目立たなくなっただけではなかったが、深く身体化されたその痕跡は、後々に至るまで折りに触れ見え隠れしたという。

こうした、有り体に言えば、獣そのもののように映る野蛮で粗野な一連の行動が、同時に何故、私たちの心を抑えようもなく激しく掻き立てるのか。翻って問い続けば、何故私たちは、違和感なく衣服を身につけ、夜の闇を避け、火を恐れずに利用するのだろうか。苦もなく食卓で箸やスプーン、ナイフやフォークを使いこなして、皿や椀に盛られた調理済みの料理を食し、用を足すために当然のごとく手洗い所に向かうのだろうか。何故服など脱ぎ捨てないのか。箸やスプーンを放り出さないのか。催したその場で用を足さないのか⁹⁾。

そんなことは考えるまでもない、あるいは考えるに値しないと退けきれんのだろうか。私たちは、今一度カマラの振る舞いに深く丁寧に思いを寄せてみよう。そして今日も現にこうして着衣し、食器を用い、手洗いに向かう私たち自身の行状に対して、その生じ来る根源に向け、改めて思いを遡らせてみよう。そうした思いが流れあわされるにつれて、私たちの衣食の「人間らしさ」における「人間であること」が、次第にその自明性や安定性を溶解し始め、「人間ではなくなること」へと開き晒されていくのを感じられはしないだろうか。寒くもないのに衣服を纏い、驚づかみできるのに箸でつまみ、用を足したいのにこらえることの当たり前さが、深く激しく揺さぶられてくる

のである。全裸のまま、驚づかんだ生ものにかぶりつき、催せば即時その場で用を足す私の姿を思い描くことは、一見恐ろしくおぞましい。しかし同時に、この姿において、私は単に「人間でない」のではない。この姿は、「人間として」という鏡に照らし出される、どこまでも人間である私の姿である。裸体と驚づかみは、「人間ではなくなること」においてなお私たちが「人間であること」を示す姿として、私たちの衣服と箸にかかわる在り方を根本から揺さぶり、その意味を問いかける。衣服を纏って箸を使う日々の衣食にあって、むしろこの裸体と驚づかみの姿を常に新たに想起することこそは、「人間として生きている」私たちが「人間ではなくなること」という深淵に常に開き晒されつつなおも「人間であること」の意味を紡ぎ出す源泉ではないのだろうか。

ここに至って、私たちは、もし可能なら、例えば椀と箸を捨てて食に臨んでみるのもよいだろう。両手で驚づかみ、貪り食うことは、人間を文化的に特徴づける「正常な食事」が、「本能のままに食べるのではなく、自己抑制をし、人目を気にしながら食べること」(石毛 2009: 323)だとすれば、食に関して「人間ではなくなる」ような乱暴で荒々しい振る舞いであるには違いない。しかし、驚づかみのなかで文字通り強く鋭くつかみ取られる食物の触感と、貪り食うなかでぶつかるように伝わってくる食物の歯ごたえや舌触りは、単に食欲充足に伴う生理的な快の次元を超えて、私たちに「人間として生きていること」の意味にかかわる原初的であると同時に新鮮な感動をもたらすのではないか。それはつまり、「つかむこと」や「食べること」が、カマラにおいてそうであったように、「驚づかみ」や「貪り食い」の形で、「人間ではなくなる」ほどの強烈な生きていく力として、私たちの「人間であること」のなかに立ち現れてくることを抑えがたい歓喜とともに感じるからだろう。

この力は荒々しい野性ではあるけれど、専ら恐れしかもたらさない類の暴力性ではなく、「人間であること」の意味の底が抜けていく禍々しさと豊饒

を併せ持っていると言うべきである。「人間ではなくなる」ほどの力強さをともなって、私たちが何かを欲し誰かを求めるとき、そこに迸り出る野性としての「つかむこと」や「食べること」は、穏やかで安定した「人間であること」の意味の底を突き破り、その欲する何かや求める誰かと全身全霊で交感、感応していく可能性へと開かれている。この交感と感応を通して、私たちは、世界における事物や他者と改めて深く激しく出会うのである。そして、「つかむこと」や「食べること」にかかわる私たちの身体器官としての「手」や「口」は、こうした「驚づかみ」や「貪り食い」といった原初的な交感と感応の体験を通して、「いのちがそこに凝集している」(鷺田 1998: 52) ような、感覚の陰翳に富んだ、意味の襞が深い多様な営みを紡ぎ出していくのである¹⁰⁾。

「人間であること」の意味の底抜けを生きる私たちは、「人間ではなくなること」へと否応なく開き晒される地平において、私たち自身であるカマラと出会う。その出会いの中に、「人間ではなくなること」に面してなお「人間であること」の意味を常に新たに紡ぎ出す瑞々しい力の源泉を見ることができるとき、私たちは、「人間ではなくなること」の暴力性への恐れを凌駕して溢れ出す歓喜とともに、内なるカマラを生き始めるのである。

註

- 1) 1988年2月に京都大学霊長類研究所が開いた学内シンポジウム。開催の中心メンバー江原昭善はシンポジウムの趣旨について、1960年代に誕生した霊長類研究が、人類に関して、生物学のみならず人文・社会諸科学にとっても、重要な新事実を明らかにしてきたことに触れつつ、次のように述べている。「いま、日常的にも切実に人間が問われている。複雑化・加速化する産業社会のなかで人間の復権が唱えられ、生き方やあり方までが問われるようになった。一方では、臓器移植や人工授精や男女生み分けその他、人間の根源からの倫理観までが要求されるようになった」(江原編 1989: 365)。そして、江原は、こうした状況において「人間とは何か」とはまさに「時代が要請している問題提起」であるとするのである。
- 2) また、これとは逆に、類人猿ないしチンパンジーの生き方を規準として、人間という「奇妙なチンパンジー」の生態や行動の特性を描き出そうとする研究もある。要領

を得た有益なものとしてさしあたり、D. モリス『裸のサル —動物学的人間像—』とJ. ダイヤモンド『人間はどこまでチンパンジーか —人類進化の栄光と鬻り—』の二著を挙げる。

- 3) 「人間とは何か」をめぐって思索する書物を繙くとき、私たちは、私人間として生きていることの根源的な「わからなさ」に関する言説にしばしば逢着する。そうした言説の一つとして、ここでは宗教哲学者磯部忠正の直截で痛切な響きを有する次の言葉を挙げておく。「人間とは何であるか。これは永遠の謎である。人間にとって、人間は根源的に不可解な存在である。人間はこの不可解性という暗い宿命を背負って生きるよりほかない。有無を言わせない出生の理不尽と、例外を許さない死の残酷とはさまれたこの実存の不可解は、なんと説明してみても「わかる」ものではない」(磯部 1976: 13)。
- 4) 現代における人間科学や教育学的人間研究の水準に照らした「野生児」という概念それ自体の批判的検討の問題はひとまず措くとすれば、「狼に育てられた子」とされる事例を含むこうした「野生児」について包括的な紹介と検討を試みた古典的文献として、さしあたりアメリカの人類学者ジングの『野生児の世界 —35例の検討—』(原著題名は、「野生人と極端に孤立した環境で生育した諸個人の事例」)を挙げる。加えて、この文献や小論の主題にかかわる文献、シング牧師の『狼に育てられた子 —カマラとアマラの養育日記—』を含む、諸外国での主要な野生児研究に関する資料が、教育心理学者中野善達らによって訳出され、『野生児の記録』(全7巻)として1970年代後半に福村出版から刊行されている。

また、「狼に育てられた子」という表現に関しても、「オオカミの乳はヒトとくらべて脂肪が三倍、タンパク質は八倍、乳糖は半分である。これではヒトの赤ん坊は消化できず、吐き戻してしまう」(小原 1989: 117)うえ、離乳や行動の自立といった成育の過程にも差がありすぎる(小原 1989: 117-118)との主張もある。しかしながら、授乳を含め、人間の子が狼に「育てられる」ことの可能性をめぐる栄養生理学的・動物学的な議論には、ここでは深くは立ち回らないことにする。

- 5) 「救出」されて1ヶ月あまり後、彼女たちの長い指の爪と、もつれまとわりつく髪の毛が切られ、「見違えるようになり、普通の子たちと同じように見えた」(マクリーン 1984: 79)時点で、彼女たちにベンガル語で名前が付けられた。年長の子は、桃色の花が咲く「ハス」を意味する「カマラ (Kamala)」、年少の子は、「明るい黄色の花」を意味する「アマラ (Amala)」と呼ばれた(マクリーン 1984: 79)。
- 6) 教育人間学者矢野智司は、「人間になることと人間を超えること」としての人間の変容の深さと激しさ、広さと豊かさを緻密な論理と鮮やかな筆致で描き出した『自己変容という物語 —生成・贈与・教育—』において、『宗教の理論』をはじめとするG. バタイユの「人間性」と「動物性」との関わりをめぐる議論を深めつつ、野生児の問題を論じている。矢野はそこで、「人間でありながら人間ではない」野生児に対する私たちの関心における両義的な感情に言及し、その両義性を、動物性への恐怖心お

よび嫌悪感と社会化されていない「野生」の人間性への憧れと特徴づける(矢野 2000: 20)。小論は、以下に詳述する西平直の作品と並んで、矢野のこの作品からも、野生児への眼差しをめぐる論理に関して、多くの刺激と示唆を受けている。

- 7) この論考は、教育への一途な期待ではないが、教育の否定や告発でも、毛頭ない形で、「一度教育への素朴な期待から離れた後に、あらためて教育に出会い直す」(西平 2005: 247)といった「反転を内に秘めた仕掛け」として、西平がその独自の教育人間学を語ろうとした著『教育人間学のために』に収められている。

小論が、この西平の論考から受けた知的刺激は極めて大きく深い。私もまた、「狼に育てられた子」の話をして初めて聴いた頃から、そして授業者としてこれに言及するようになってからも依然として、カマラの歩んだ生涯に対する、ある釈然としない疼痛の感覚を拭い去れないできた。それは、カマラに対する憐れみや喪失感とも養育したシング牧師夫妻に対する非難や反感とも言い切れない、文字通り「何とも言えない疼き」の感覚であった。西平の論考は、私のこの「疼き」の一端を鮮やかに言語化してくれた。しかし、カマラに対する小論における私の眼差しは、西平の助けを借りて、「疼き」の一端を言語化出来た今、「教育はカマラを幸せにしたか」という問いへと歩み入る以前に立ち止まり、「疼き」のような痛みを伴いながらも、「何故私たちはかくも深く強くカマラに惹かれるのか」というカマラを通した自己自身への問いに寄り添おうとするものである。

- 8) 「白アリ塚の高さは約3-3.6メートルほどで、ヒンズー教の神殿みたいな形をして」(マクリーン 1984: 58-59)おり、それは「二階建てのビルほどの高さ」であったと記されている(シング 1977: 32)。
- 9) これらに関して、歴史社会学的なアプローチを参照しようとするなら、例えば、「礼儀」から「文明化」へという道筋で、社会生活における不快や羞恥といった情感の制御と洗練の発展過程を位置づけていったN. エリアスの鋭利な分析(エリアス 1977, 1978)が挙げられるが、小論における人間学的な関心の在り方とは異なっている。
- 10) 臨床哲学者鷺田清一は、こうした視点からの「口」の営みについて、「口はいそがしい器官だ。呼吸する、食べる、飲む、しゃぶる、唾を吐く、指をなめる、糸を噛み切る、物をくわえる、乳房にかじりつく、唇を合わせる、そして話す。まるで、いのちがそこに凝集しているみたい。だからだろうか、いのちのぎくしゃく、いのちの不安定は、ほとんどなんらかのかたちでこの場所におよんでくる。息を吸いすぎて過換気症にはまる、過食や拒食におちいる、極端な早食いになる、爪や鉛筆を噛みちぎる、憑かれたように話しつづける…」(鷺田 1998: 52)と表現している。

また鷺田は、「愛撫」「まさぐり」「震え」「ぬくもり」「こもり」といった広く深く身体感覚の襲に分け入ったエッセイ(鷺田 2006)でも、ここでの「口」や「手」の営みについて繊細で示唆的な知見を提示している。

引用・参考文献

- 石毛直道 2009 『石毛直道 食の文化を語る』 ドメス出版
- 磯部忠正 1976 『「無常」の構造 ―幽の世界―』 講談社
- 上田閑照 1991 『生きるということ ―経験と自覚―』 人文書院
- 上田閑照 1998 『人間の生涯ということ』 人文書院
- 江原昭善編 1989 『サルはどこまで人間か ―新しい人間学の試み―』 小学館
- エリアス、N. 1977 赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳 『文明化の過程・上 ―ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷―』 法政大学出版局
- エリアス、N. 1978 波田節夫・溝辺敬一・羽田洋・藤平浩之訳 『文明化の過程・下 ―社会の変遷／文明化の理論のための見取図―』 法政大学出版局
- 小原秀雄 1989 『教育は人間をつくれるか ―人間学への招待②―』 農山漁村文化協会
- ジング、J. A. L. 1977 中野善達・清水知子訳 『狼に育てられた子 ―カマラとアマラの養育日記―』 福村出版
- ジング、R. M. 1978 中野善達・福田廣訳 『野生児の世界 ―35例の検討―』 福村出版
- ダイヤモンド、J. 1993 長谷川真理子・長谷川寿一訳 『人間はどこまでチンパンジーか ―人類進化の栄光と霧り―』 新曜社
- 西平直 2005 『教育人間学のために』 東京大学出版会
- バタイユ、G. 1985 湯浅博雄訳 『宗教の理論』 人文書院
- マクリーン、C. 1984 中野善達訳編 『ウルフ・チャイルド ―カマラとアマラの物語―』 福村出版
- モリス、D. 1979 日高敏隆訳 『裸のサル ―動物学的人間像―』 角川書店
- 矢野智司 2000 『自己変容という物語 ―生成・贈与・教育―』 金子書房
- 鷺田清一 1998 『普通をだれも教えてくれない』 潮出版社
- 鷺田清一 2006 『感覚の幽い風景』 紀伊國屋書店

(鷹野 克己、立命館大学文学部教授)